

# ハイブリッド型オンライン授業の設計に関する検討

## －面接授業とオンデマンド型授業を組み合わせた授業実践－

羽田邦弘

### 1. 背景

#### 1.1. 大学におけるオンライン授業

新型コロナウイルス感染症(Covid-19)の感染拡大は、大学の授業の在り方に大きな影響を与えた。とりわけ、登校できない学生の学びを止めないための手段の一つとして、オンラインを活用した授業が積極的に行われるようになった。しかしながら、こうした遠隔で行われる授業は、中央教育審議会「新たな時代を見据えた質保証システムの改善・充実について(審議まとめ)令和4年3月18日」(以下「審議まとめ(2022)」という。)が指摘するように、「新型コロナウイルスの感染拡大という緊急事態への対処として急速に取組が広がったものであり、多くの大学において、試行錯誤しながら改善を図っていく段階」にあると考えられる。

そのような中、2023年3月28日に文部科学省は、「大学・高専における遠隔教育の実施に関するガイドライン」(以下「ガイドライン」という。)を公表し、遠隔教育の質保証、面接授業と遠隔授業を効果的に組み合わせたハイブリッド型教育の確立に向け、遠隔教育の利点や留意点等を示した。これは、審議まとめ(2022)の中で、遠隔教育の質保証や面接授業と遠隔授業を効果的に組み合わせたハイブリッド型教育の確立に向けたガイドラインを策定することが示されたことを受けたものであり、今後の授業における遠隔教育の在り方に大きな影響を与えるものである。

#### 1.2. オンライン授業の分類

大学設置基準(昭和31年文部省令第28号)第25条第2項において、「大学は、文部科学大臣が別に定めるところにより、前項の授業を、多様なメディアを高度に利用して、当該授業を行う教室等以外の場所で履修させることができる」と規定されている。遠隔授業は、教室にて対面形式で実施される授業に対し、「多様なメディアを高度に利用すること」と「教室以外の場所で授業を履修させること」を条件に成立する授業と解される。そして、「多様なメディアを高度に利用した授業」については、平成13年文部科学省告示第51号(メディア授業告示)

により、通信衛星、光ファイバ等を用いることにより、多様なメディアを高度に利用して、文字、音声、静止画、動画等の多様な情報を一体的に扱うもので、次に掲げるいずれかの要件を満たし、大学において、面接授業に相当する教育効果を有すると認めたものであること、として以下の2つの要件が示されている。

- ①同時かつ双方向に行われるものであって、かつ、授業を行う教室等以外の教室、研究室又はこれらに準ずる場所において履修させるもの
  - ②毎回の授業の実施に当たって、指導補助者が教室等以外の場所において学生等に対面することにより、又は当該授業を行う教員若しくは指導補助者が当該授業の終了後すみやかにインターネットその他の適切な方法を利用することにより、設問解答、添削指導、質疑応答等による十分な指導を併せ行うものであって、かつ、当該授業に関する学生の意見の交換の機会が確保されているもの
- 上記①はWeb会議方式による同時双方向型の授業に、②はオンデマンド型の授業に当てはめて考えることができる。これら2つの授業の分類を整理したのが表1である。

表1 多様なメディアを高度に利用した授業の分類

	同時双方向型	オンデマンド型
形態	同時かつ双方向	同時かつ双方向である必要はない
履修場所	・授業の教室以外の教室 ・研究室 ・上記に準ずる場所	授業の教室以外の場所
教員	・発信場所にいる ・随時双方向のやり取りを行う ・学生に質問機会を与える	・発信場所にいる必要はない ・授業後に設問解答等の十分な指導も行う
留意点	・面接授業に近い環境で行う	・学生の意見交換の機会を確保する ・教員の補助として指導補助者を置く

これらの整理をもとに本稿では、遠隔授業とは多様なメディアを高度に利用しながら、教室外の場所で行われる授業であり、同時双方向型とオンデマンド型の2つに分類されると捉える。その際、高度なメディアとして想定されているのが主にICTであることから、これらの要件を満たしながら遠隔で実施される授業を、本稿では「オンライン授業」として扱う。

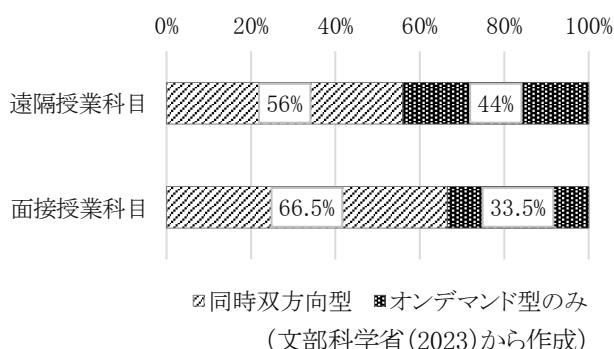
### 1.3. 遠隔授業の実施状況

文部科学省が令和4年度に大学を対象に実施した調査研究(2023)によれば、授業形態として遠隔授業を取り入れている授業の割合は、令和4年度は約4割であった。その中身は、遠隔授業を実施する授業時数が半数を超える授業(以下「遠隔授業科目」という。)が12.1%、遠隔授業を取り入れているが授業時数が半数を超えない授業(以下「面接授業科目」という。)が28.4%となっている。

一方、面接授業科目において遠隔授業を取り入れている割合は、令和3年度が40.0%、令和4年度が59.4%であり、対面で行われる講義や演習等の割合が増加した。令和2年5月の時点では大学等の約9割が全面的に遠隔授業を実施していた(中央教育審議会2022)状況を鑑みると、遠隔授業に対する取組が後退したとも受け取れるが、緊急事態宣言下の刹那的な対応であったことを考慮すれば、コロナ禍を経て各大学が学生や科目等の実態に合わせた選択を行った結果と取るべきであろう。そして現在では、大学では授業におけるICTの活用推進の動きと呼応しながら遠隔授業の工夫が行われている。

また、令和4年度における遠隔授業科目と面接授業科目のそれぞれの実施形態について、「同時双方向型」または「オンデマンド型」の割合を示したものが図1である。

図1 遠隔授業の形態別実施割合



上記の結果から、全体では遠隔授業科目よりも面接授業科目の方が遠隔授業による実践例が多く見られ、面接授業科目の授業では同時双方向型とオンデマンド型の割合が概ね2対1となっていることがわかる。

## 2. 問題と目的

### 2.1. オンライン授業における課題

コロナ禍において多くの大学が急遽オンライン授業を開始したが、その実践を通して、面接授業とは異なる様々な課題が報告されている。

田中(2021)は、教職課程における必修科目で実施したオンデマンド型オンライン授業について、学生対象のアンケート調査を行い、学習や課題等の自己管理が難しい、教員に質問したり友達を作って相談したりすることがしにくい、学習内容を理解できていないか不安、疲労や視力低下等の健康への影響などを指摘している。

また、担当した教員の立場から明らかとなった課題については、インターネット環境、教材配信や出席等の管理、成績評価の方法等の改良が必要、授業内容について授業者が協力して教材設計技術の向上を図ることが必要等の課題が指摘されている(本田・坂元2020)。

さらに、ICTを活用して授業を遠隔で行う際のデメリットについて、審議まとめ(2022)では、質問等、相互のやり取りの機会が少ないこと、友人と授業が受けられないこと、身体的な疲労が大きいことなどをあげている。

こうした様々な課題を取りまとめた文部科学省の調査研究(文部科学省2023)では、オンライン授業に関する授業運営上の課題をタイプ別に同時双方向型とオンデマンド型とに分けた場合、いくつかの項目において2つの間で大きな差が見られたことが報告されている。大きな差が見られた項目は、「教員と学生との円滑なコミュニケーション」、「遠隔授業の教材に対する著作権の扱い」、「障害等発生時の迅速な対応」、「学生のプライバシー、個人情報への配慮」の4項目であった(図2)。

図2 授業運営上の主な課題

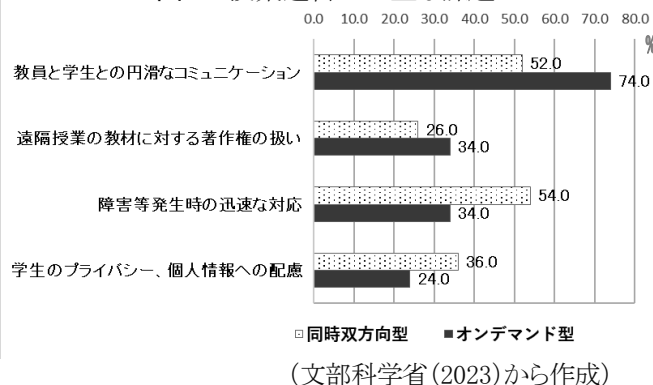


図2のとおり、「教員と学生とのコミュニケーション」に関しては、半分以上が課題と捉えており、特にオンデマンド型授業では同時双方向型の約 1.5 倍、全体の 2/3 が課題と考えている。他の3項目については、同時双方向型の授業における課題意識の方が高くなっているが、オンデマンド型授業においても共通する課題であり、これらはオンライン授業が抱える特徴的な課題と言えよう。

以上のように、実践を通して様々な課題が確認されており、大学におけるオンライン授業は、引き続き「試行錯誤しながら改善を図っていく段階にある」と言える。ただし、改善の方向性については、遠隔で行うことのデメリットを克服しながら、オンライン授業としての強みを発揮し、学修者本意の授業としていくべきである。それは、従前からの講義等による面接授業を代替することではなく、共存して双方の良さを生かしながら新たな教育を構築していくことであり、そうすることが最終的に大学教育の質保証につながると考えるからである。

以上のことから、オンライン授業が推進されていく中でどのように授業を運営していくか、どのように評価を行うか、という点については更に検討すべき課題である。

## 2.2. 本研究の目的

コロナ禍においては、本学でもオンラインを活用した同時双方向型の授業に取り組んだ。学生が登校できない時期には教員が主にWeb会議ツール等を活用して授業を配信した。その後の分散登校の時期には、登校した学生に対する教室での授業と登校できない学生とをリアルタイムでつなぐハイフレックス型の授業を実践した。こうした経験を通して、多くの課題と共にオンライン授業の改善につながる様々な工夫や示唆が得られたと筆者は感じている。新型コロナウイルス感染症が落ち着いた見せた現在、これまでの成果や課題をもとに、オンラインを利用した新たな授業方法について検討する意義は大きいと考えている。特に、従前から行われている面接授業(大学設置基準第 25 条第1項等)と遠隔授業とを組み合わせるハイブリッド型授業の検討は、オンライン授業を特別扱いすることなく今後を見据えた効果的な授業づくりの観点からも必要である。

こうした認識のもと、本研究では、ハイブリッド型授業について、2023 年度前期に筆者が実践した授業を評価することで、効果的な授業づくりに関する知見を得ることを目的とする。

## 3. オンデマンド型授業の実践

### 3.1. 授業概要

実践した授業は、2023 年度前期の共通科目(選択)「21 世紀型の教育」(90 分、15 回)である。この科目は、全学科開放科目であり、74 名の履修(8 学科から 4 年次 7 名、3 年次 17 名、2 年次 50 名)であった。

今年度は、オンデマンド型授業を試行的に導入するという大学の方針の下、15 回の授業のうち、8 回を面接、7回を遠隔(オンデマンド型)で実施することで計画し、シラバスを作成した。

### 3.2. 授業の目標

この科目は、学生が自身の専門分野を超えて幅広い教養を身に付け、知的・創造的能力を発揮しながら身近な問題や課題の解決に向けて主体的に取り組む態度を育成することを目指した科目の一つである。「20 世紀の教育とは何であったのか」、「21 世紀型の教育とは何か」について、社会の出来事や人々の考え方をもとに考察し、その時々々の教育の役割を探る。さらに、諸外国を含む教育改革の潮流を探りながら 21 世紀の教育が目指すものを考えながら、教育に対する学生の意識を高めるとともに、自己の生涯学習への主体的な取組を促すことを目指している。

具体的な到達目標は以下の3つである。

- 1) 20 世紀の社会状況に関連させ、教育がどのような変遷を辿ってきたのかを学校教育の観点から説明できる。
- 2) 主に 20 世紀の教育手法と 21 世紀に求められる資質・能力の育成のための教育手法とを比較し、その違いについて述べることができる。
- 3) 現代社会に求められる資質・能力に関する考察を深め、それらを身に付けるために自ら積極的に行動することができる。

### 3.3. 実践の内容

授業は、1 コマ(90 分)を教室における面接授業又は教室外におけるオンデマンド型授業のどちらかで実施した。それぞれの分け方について15回分を示したものが表2である。

オンデマンド型授業を前半で3回、後半で4回に分けて実施した理由は、途中で学生の学習状況を把握し、可能な限り改善を試みようとしたためである。また、オンデマンド型授業の各回の基本的な流れは、①掲示された授業資料の確認、②内容に関する動画の視聴(60分

程度)、③オンラインでの確認テスト、④記述による課題(オンライン提出)である。これらについて授業日の前日までに教務支援システムにより履修者に連絡し、1週間以内に指示された内容を終えるよう学生に指示した。

表2 授業の形態と内容

回	授業形態	内容
1～3	面接	ガイダンス、講義
4～6	オンデマンド	資料、動画、テスト、課題
7～8	面接	講義
9～12	オンデマンド	資料、動画、テスト、課題
13～15	面接	講義

## 4. 結果

### 4.1. 遠隔授業に対する学生の受け止め

「21世紀型の教育」の授業の一部をオンデマンド型で行うことに対する学生の受け止めは非常に肯定的であり、履修者のほとんどが「よいこと」と感じていた。コロナ禍でのオンライン授業の経験などから、学生は教室外で受講する授業に抵抗が少なくなり、オンライン授業に対する自分なりの学習スタイルを持ち始めたと言えるだろう。そう考える理由は、様々なメディアに触れながら生活している学生にとって、授業がオンラインで行われることは自然なことだからである。本学が2021年8月に全学生を対象に実施した「2021年度前期分散型授業・遠隔授業に関するアンケート(以下「2021年度前期アンケート」という)」(回答率81.7%)では、全体の82.4%が、遠隔授業が自分の学習スタイルに合っていると感じており、学年別では1年次が86.7%で最も高かった。

これらの結果からもわかるように、オンラインを活用する授業に対する学生の受け止めは非常に前向きであり、今回の授業の一部をオンデマンド型で実施することに関しても質問や意見などは、ほとんどなかった。

### 4.2. 教材

オンデマンド型授業で使用する授業資料、確認テスト(選択問題)、記述課題については、他の授業と同様に学内の統合型Webシステムにより学生に配信した。このシステムには容量制限があったため、動画はMicrosoft Streamを使って視聴できるようにした。

動画は、スライドを使いながら内容を解説していく、いわゆる講義型のものとし、全体の時間は概ね60分を目安とした。動画作成の環境は整備されていなかった

ので録画は個人で行い、編集等は特に行わなかった。この動画に対して学生から、「長すぎる」という感想が多く出されたため、第9回以降の授業では、30分程度の動画を2本制作することにした。1回に視聴する動画の長さについては、30分以下が適切と考えている学生が8割ほどを占めており、その内の約3割は15分以下が適切と考えている。また、視聴する際には、およそ6割の学生が倍速で視聴したと答えた。

確認テストと記述の課題は、授業資料と動画を確認しながら、学生は概ね意欲的に取り組んでいた。作成者として問題量や難易度について慎重に判断したつもりであったが、学生からは、「難しすぎる」、「量が多すぎる」などの感想が時々寄せられた。オンデマンド型授業では学生の学習状況の把握が難しいため、教員側の一方的な出題になりやすい。また、提出期限をうっかり忘れてしまい、後日別の方法で提出する学生も見られた。

### 4.3. やり取り等の機会

学生と教員との間の質疑応答等や学生同士の意見交換等の機会は、ほとんどなかった。教員への質問や相談は、学内メール等を使って何時でも連絡できる環境にはあったが、連絡してくる学生はいなかった。授業後の感想では、「わからない部分の質問や困った時の相談に応じてもらえるか不安」と答えた学生の割合が、約4割を占めており、この点に関する配慮が足りなかったと感じている。

オンデマンド型授業では、学習する際の場所や時間については学生本位となるため、教員が個々の学生の状況を把握し、支援に向けた工夫を行うことが必要であり、そのことが面接型授業と大きく異なる点である。

### 4.4. 学修評価

この授業全体の評価については、シラバスにおいて以下のとおり計画した。

各授業回又はテーマごとに指示する課題(リアクションペーパーを含む)への取組(48%)、ミニテスト(32%)、レポート(20%)とし、60点以上を合格とする。

到達目標 1)

課題への取組(20%/48%)、ミニテスト(20%/32%)

到達目標 2)

課題への取組(20%/48%)、ミニテスト(12%/32%)

到達目標 3)

課題への取組(8%/48%)、レポート(20%/20%)

今回のオンデマンド型授業は、教室での面接型授業と組み合わせて実施したため、オンデマンド型の部分だけの単独での学修評価は行っていない。今後は、実施方法等にもよるが、オンライン授業の部分の個別の評価も必要となろう。

オンデマンド型で実施した 7 回の授業については、確認テスト及び記述の課題を毎回実施し、こまめな評価に努めた。しかしながら、学生に対するフィードバックを適時に行うことはできず、面接授業の際に全体に対する解説やコメントを返すにとどまった。また、動画については、学生がいつ、どれだけの時間視聴したかといった状況について把握できていない。さらに、受講する際のなりすましや剽窃等の不正行為の防止については、特段の措置を講ずることができなかったため、ガイダンスの等の時間を使って受講態度に関する学生の注意を喚起した。

## 5. 考察

### 5.1. オンデマンド型授業の評価と設計

今回の実践によるオンデマンド型授業は試行という位置づけであり、あまり制限のないままに設計した。その結果について初歩的な評価を行い、改善点を見出すことで今後の授業設計につなげていきたい。本稿では、授業における教員の働きかけに焦点を絞り、評価の理論的枠組としてガニエの9教授事象を用いる。ガニエは、授業や教材を構成する過程を「学びを支援するための外側からの働きかけ(外的条件)」という視点でとらえ(稲垣・鈴木 2015)、教員が提供すべき過程を9つの事象に分類した(表3)。授業においては、9 教授事象の全てが含まれている必要はないとされるが、この枠組みをもとに全体を通して分析することで、授業設計に関する再点検ができると考えた。

表3 ガニエの9教授事象

導入	1. 学習者の注意を喚起する
	2. 学習目標を知らせる
	3. 前提条件を確認する
展開	4. 新しい事項を提示する
	5. 学習の指針を与える
	6. 練習の機会を設ける
	7. フィードバックをする
まとめ	8. 学習の成果を評価する
	9. 保持と転移を高める

事象 1~4 については、最初のガイダンスの時間やオンデマンド教材に含めて実施することができていた。事象の6と 8 は、授業資料、確認テスト、記述の課題に含めることができたが、6については機会が少なく十分とは言えなかった。5、7、9については、今後の改善が必要である。特に、7は面接授業の際にフィードバックを試みたが、全体に対して行うだけでなく、一人一人の学びに即して適時に回答やコメント等を伝える工夫が必要である。

以上の分析をもとに、オンデマンド型授業の設計に関する考え方をインストラクショナルデザインのプロセスにより整理する。インストラクショナルデザインは、「教育活動の効果・効率・魅力を高めるための手法を集大成したモデルや研究分野、またはそれらを応用して学習支援環境を実現するためのプロセス」のことであり、日本では 2000 年頃から注目を集めるようになった(鈴木 2005)。その中の一般的なプロセスモデルである ADDIE (分析:Analyze, 設計:Design, 開発:Develop, 実施:Implement, 評価:Evaluate)モデル(図3)は、オンライン授業の設計に役立つと考える。ADDIE モデルの注目すべき点は、「評価」の活動からのびる改善の矢印であり、これは、「実践の途中でも、その活動を確認・評価することで、よりよい授業実践にしたいという考え」(松田ほか 2017)を表している。そうした確認や評価を授業の途中で実施し、改善できる点はできる限り改善することは、学生の学習状況の把握がしにくいオンデマンド型授業をよりよいものにしていくために必要である。

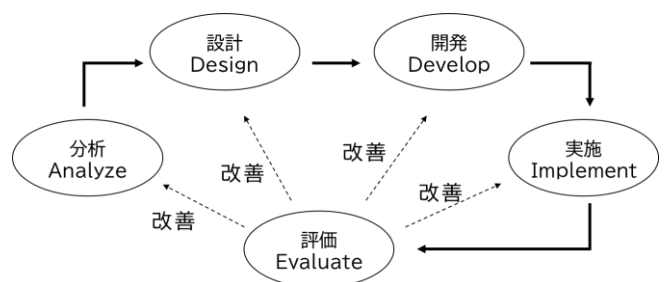


図3 ADDIE モデル(ガニエほか 2007)

このことを意識して今回の実践では、具体的に次のような改善を行った。まず、学生の意識や学習状況を把握するため、面接授業の際に学生に対するアンケート調査を3回実施し、結果を分析した。また、第2回及び第3回の授業では、学生に教材のプロトタイプを実際に体験してもらい、その反応をもとに教材等の改善を図った。そして、第4回~第6回の授業後には、学生の

意見等を参考に動画を分割したり確認テストの難易度を調節したりした。

オンデマンド型授業では、学生の学習時間や場所、使っている情報端末や通信回線等の状況も異なることから、教員が計画したとおりに学習が進むとは限らない。そのため、教員は可能な限り個々の学生の学習状況の把握に努め、それぞれの活動を評価しながら改善すべきところは躊躇せず修正していくことが重要である。

## 5.2. やり取りの機会の確保

双方向型で実施した遠隔授業に関する本学の 2021 年度前期アンケートでは、「遠隔授業で教員とのコミュニケーションはスムーズだった」の項目について、「あてはまる」が 16.0%、「ややあてはまる」が 49.1%であり、全体の約 2/3 の学生が肯定的に回答した。しかしながら、残りの 1/3 の学生は、教員とのコミュニケーションがスムーズではなかったと感じており、今後改善が必要な課題となっている。

オンデマンド型授業では、Web 会議ツールを活用した同時双方向型の授業よりも教員とのコミュニケーションが取りにくいことから、教員と学生が適時につながる工夫が必要である。例えば、学生が質問等を随時書き込むことができる掲示板や質問サイト等の設置、オンラインによるアンケートのこまめな実施、よくある質問とその回答をまとめた FAQ の作成、などが考えられる。

## 5.3. 学修評価

オンライン授業において学生の学修状況等を適切に評価することは重要であるが、今回オンデマンド型授業の実践を通して大きく2つの課題が明らかとなった。

まず、学生の学習実態を的確に把握することが難しいことである。そのため、こまめな評価を実施して形成的評価を目指すことが重要と考える。今回の実践では、授業ごとに確認テストや記述課題により、学生の理解度等の確認を試みた。しかしながら、学習過程のどこで学生が難しいと感じたのか、どのように思考を積み上げていったのか、といった点の確認はできなかった。一方、基本的な知識や技能に関しては、ドリル形式のオンラインテストによって定着が図れたのではないかと感じている。今後に向けた改善策として、各回の授業のねらいを明確に示した上で、オンラインによる客観テスト、ミニレポートやリアクションペーパー等をこまめに実施できるように内容等を更に充実させていくことが考えられる。

次に、指導と評価の一体化を達成できるよう、学生に対する適切なフィードバックを充実させることである。今回のようなオンデマンド型では、その都度学生に助言したりコメントを返したりすることが難しい。そこで例えば、確認テストでは事前いくつかのメッセージを用意しておき、終了後の点数に応じて自動で配信できるようにするなどが考えられる。また、記述式のレポート課題についても、できるだけ早く評価を行ってコメント等を学生に返すよう心掛けることも重要となろう。

以上のことを含め、学修評価を改善していくためには、LMS(学修管理システム)の整備・充実も重要である。今回の実践では、学生に動画の視聴を義務付けたが、いつ、どれくらいの時間視聴したかという記録(視聴ログ)を残すことがシステム上でできなかったため、動画の視聴状況を学修評価に加えていない。また、動画の配信と教材やテスト等の配信が別々のシステムから行われたため、管理する教員側も煩雑さを感じていたが、学生側にもわかりにくい点があったものと推測される。そのため、オンライン授業を行う際には、動画の視聴ログが把握でき、教材等を一元的に配信・管理することができる LMS の導入が望ましい。

## 5.4. ハイブリッド型オンライン授業の改善

遠隔授業は、「新型コロナウイルスの感染拡大という緊急事態への対処として急速に取組が広まったものであり、多くの大学において、試行錯誤をしながら改善を図っていく段階にある」と考えられ、「面接授業と遠隔授業の双方の良さを生かした教育が提供されることが求められる」(審議まとめ 2022)。このように、面接授業とオンラインを利用した遠隔授業とを効果的に組み合わせたハイブリッド型授業の推進が期待されている。

授業がハイブリッド型で行われることに対して肯定的に捉える学生は多い。例えば、今回の授業後の意見として、「オンデマンド型も取り入れつつ対面も取り入れる方法がよい」、「オンデマンドと対面どちらかに偏るのではなく柔軟な形をとってもらいたい」、「全ての授業にオンデマンド型を導入するのではなく、選択肢として用意することで多様な学習ニーズに対応できると考える」などがあり、全体としてそのような捉え方をする者も多くいたように感じている。一方、遠隔授業が自分の学習スタイルに合っていないと考える学生もいる。「2021 年度前期アンケート」では、対面授業が自分の学習スタイルに合っていると強く感じている学生のうち、33.2%が遠隔授業は自分に合わない、と回答している。これらの結果が

ら、面接授業と遠隔授業を組み合わせる新しい学習スタイルを見出そうとする学生がいる反面、二項対立的に捉え面接授業に軸足を置いたままの学生がいることもわかる。したがって、ハイブリッド型オンライン授業を推進していく際には、学生の実態を踏まえて面接授業と遠隔授業のメリットやデメリットを精査し、それらに対する学生の理解を深めながら実践していくことが重要である。

## 6. おわりに

本稿では、2023年度前期の授業実践をもとに、面接授業とオンデマンド型授業を組み合わせたハイブリッド型オンライン授業の評価と改善について検討した。課題として、学生の学習状況を的確に把握し、必要なフィードバックをすること、教員と学生及び学生同士のオンライン上でのやり取りに関する検討が必要なこと、こまめに資料を積み上げて学修評価をおこなうこと、が明らかになった。

これまで対面で行われていた授業がハイブリッド型に代わることは、学生にとって大きな転換だが、教員にとっても大きなチャレンジである。社会全体のデジタル化に合わせて価値観や仕組みが多様化していく中で、大学の授業も変わっていく必要がある。よりよい授業を行うということは、授業の目標にクラスみんなが到達し(効果)、なるべく短時間でそれを成し遂げ(効率)、そして「もっと学びたい」という気持ちで授業を終わる(魅力)こと(稲垣・鈴木 2015)と考えれば、学生一人一人が主体的に自分の学びを実現することが期待されるオンライン授業には多くの可能性があると考えられる。

本研究では、オンライン授業を効果的なものとするための学内組織の在り方や授業を担当する教員の知見等の向上については、触れることはできなかった。大学全体のディプロマ・ポリシーを踏まえ、オンライン授業を推進していくためには、オンライン授業をカリキュラム・ポリシーに位置付けることも必要となってくる。また、ブレンディッド型授業やメタバースの導入など、新たな授業形態に関する研究も今後必要となる。

## 参考文献

中央教育審議会(2022) 新たな時代を見据えた質保証システムの改善・充実について(審議まとめ)令和4年3月18日. 大学分科会質保証システム部会  
R.M.ガニエ・W.W.ウェイジャー・K.C.ゴラス・J.M.ケラー

(著), 鈴木克明・岩崎信(監訳)(2007) インストラクショナルデザインの原理. 北大路書房, 京都  
本田弥生, 坂元洋一郎(2020) オンライン授業に関する一考察～著作権とインストラクショナルデザインの視点から～. 日本経大論集 50(1), 43-52  
稲垣忠, 鈴木克明(2015) 授業設計マニュアル Ver.2. 北大路書房, 京都  
松田岳士, 根本淳子, 鈴木克明(編著) 日本教育工学会(監修)(2017) 大学授業改善とインストラクショナルデザイン. ミネルヴァ書房, 京都  
文部科学省(2018) 中央教育審議会、大学分科会、制度・教育改革ワーキンググループ(第18回) 配布資料6「大学における多様なメディアを高度に利用した授業について」, 高等教育局大学振興課  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/c\\_hukyo4/043/siryu/1409011.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/c_hukyo4/043/siryu/1409011.htm)  
(参照日 2023.12.25)  
文部科学省(2023) 大学・高専における遠隔教育の実施に関するガイドラインについて(周知)令和5年3月28日事務連絡. 高等教育局専門教育課, 大学教育・入試課  
鈴木克明(2005) e-learning 実践のためのインストラクショナル・デザイン. 日本教育工学論文誌, 29(3), 197-205  
田中希穂(2021) 大学におけるオンライン授業の実践と課題. 同志社大学教職課程年報(10), 48-62